成故書記す、

〔茶道獨言〕茶をふり立て客に出すこと、能々心を入て、第一にふりをよくすべきなり、休○千利休の詠にも、ふりやはらげて隔心もなし、などいわれし、至極のことなり、能ふるに至つて茶の味ひを出し、茶味やわらかになること、能ひとの去る所なり、去かし嚴寒の時に至つて其味ひを忘れ、湯のさむる迄もふるなどのことは、是又よろしからんこと、誰も去る所也、是にこそ常々の稽古の有こと也、

〔槐記〕享保十二年霜月十日、參候、今ノ上流ノ茶人ノ濃茶ヲ立ルハ、全ク茶筌ヲフルコトヲ用ヒズ、只コヂマハスヤウニシテ出ス故、泡ナド立コトハ勿論ナシ、惡ク下手ノ立ルニハ、底ニ殘ルコト多シ、茶ハ好クフリタルガ味好ト存ズ、久シクフレバ茶氣ヲ脱スト申ス説ハ、イカヾニ候ヤト窺フ、仰ニ、○近衛家熙茶筌ノフリヤウハ、茶ニヨルコトナリ、初むかしナドハ、味ハ薄ク氣ヌケシ故ニ、久クフリテハ惡シ、茶ノ下ヲ上ヘフリタテ、サツト建ルガ好シ、後むかしハ、氣味トモニ厚キ故ニ、上下トモニヨクフリタテ、ヨク〳〵立ルガ好ト仰ラル、

〔備前老人物語〕風爐の茶湯に、中水をさすといふことは、利休不時の茶湯に茶をたてし時、茶碗へ茶をすくひ入、そののち水さしの水をたぶ〳〵と汲て釜へ入れしより、中水をさすといふこと、何の故もなくはやりし也、ある人兩輩不審にをよび、利休に問ければ、されば、よ、その朝客ありて、その釜の湯なかりしかば、湯をあらためんがために水をさしける也、定りて中水をさすといふ事をば去らず、とひ給はずば申すまじきに、よくこそ問給ひたれといひてよろこびしとなり、これをとひける人は、高山右近、柴田監物なりし、

〔茶道獨言〕風爐にて茶を立るとき、一柄杓釜に水をさし、其後立る事、炎氣の時なれば、ねつてつの湯にて茶を立出す事如何故、水をさすなど心得る人もまゝあるよし、大なる心得違ひなり、茶味